

# 線香・蚊取り線香原料としてのタブ粉の歴史

藤 井 弘 章

## はじめに

線香・蚊取り線香には、さまざまな原料が使用されている。香料や殺虫成分だけでなく、形を整えるための粘結剤（粘着剤、結着剤）も原料として重要な位置を占めている。粘結剤のなかでも、タブの樹皮や枝葉を粉末にしたタブ粉はとくに重宝されてきた原料といえる。筆者は、蚊取り線香の原料商売・製造販売をおこなってきた会社の社史を編纂する過程で、線香・蚊取り線香産業におけるタブ粉の重要性に注目するようになった<sup>(1)</sup>。

しかしながら、線香・蚊取り線香の粘結剤としてのタブ粉に言及した文献は限られており、研究もごくわずかである〔横山 2013、山形 2014〕。そもそも、線香製造に関しては、産地ごとに文献がまとめられているが、全国的な分布や歴史についても全貌は把握されているとはいいがたい。一方、蚊取り線香については、殺虫成分として重要な位置を占めてきた除虫菊に関する文献が多く、蚊取り線香産業の歴史も除虫菊を中心に語られることが多い。

したがって、本稿では筆者がこれまで集めてきた断片的な文献をもとに、線香・蚊取り線香における粘結剤の変遷を明らかにし、タブ粉配合の起源・目的などを考察することにした。

## 第1章 線香の歴史

煉香や香木に比べると線香の歴史は新しい。16世紀末、明の李時珍は『本草綱目』に線香の製造方法を記している。線香はこのころに中国で製造されるようになったと考えられている〔山田 1978〕。日本における線香製造に関しては不明な点も多い。堺などで線香が製造されるようになったのは18世紀前半と考えられている〔山田 1978、愛知県線香卸商組合 2015〕。また、17世紀中ごろに中国より渡来した竹線香（竹ひごを芯棒にした線香）を長崎で作り始め、17世紀後半から18世紀初

めにかけて竹芯のない線香が堺などで作られるようになった、という説もある〔烏毛 2013〕。いずれにしても、18 世紀前半には堺などで竹芯のない棒状の線香が作られるようになったと考えられている。

その後、19 世紀中ごろ（江戸末期）になると、淡路島の江井浦（現在の兵庫県淡路市）では堺より職人を招いて線香製造が開始された〔浜岡 1988、兵庫県立津名高等学校社会科研究部 1961、星野 1985〕。下野の今市（現在の栃木県日光市）でも、江戸末期に越後（現在の新潟県）から技術が伝えられて、線香製造を開始している〔黒岩ら 1980〕。このように、江戸末期になると、日本各地で線香製造が開始され始めた。紀伊の田辺（現在の和歌山県田辺市）周辺でも江戸末期には線香製造をおこなっていたようである〔安藤 1993〕。

明治初年から昭和中期にかけての全国の統計データを集成した「都道府県統計書データベース」を用いて「線香」を検索すると、宮城県・新潟県・石川県・長野県・愛知県・三重県・大阪府・兵庫県・奈良県・香川県・福岡県・熊本県において、線香の製造や販売をしていたことが分かる。今のところ、線香の製造・販売・流通に関するまとまった文献や研究はみられないが、筆者が確認しているだけでも、「都道府県統計書データベース」の地域以外にも各地で線香製造がおこなわれていたことが分かってきている。昭和初期には、堺（大阪府）・京都・奈良・淡路島（兵庫県）・久留米（福岡県）・八女（福岡県）などが産地とされており〔重松ら 1936〕、ほかにも日光（栃木県）・名古屋周辺（愛知県）などの有力な産地も形成されていた。その他、茨城県・静岡県・和歌山県・岡山県・徳島県・島根県などでも家族経営的な線香製造はおこなわれていた。ところが、戦後になると零細な線香製造は淘汰されていき、現在では全国の約 7 割の線香を兵庫県の淡路島で製造するようになっている〔愛知県線香卸商組合 2015〕。

## 第 2 章 昭和中期における線香の原料と製造工程

線香の原料には、時代や産地によってさまざまな種類が用いられてきた。一例を示すと、昭和初期の記録には、「線香の普通品の原料香粉には主として副業林産物たる杉葉粉、楠葉粉（葉粉）、楠樹皮粉（本粉）」が用いられ、「香料には白檀・沈香・龍腦・安息香・甘草・甘松等の粉末、樟や檜の鋸屑等を用ゆる。」とある〔重

松ら 1936〕。

現在では原料の構成として、タブの樹皮粉だけで作られるもの、香りにこだわりをもってさまざまな香料を加えて作られたもの、沈香や伽羅をぜいたくに使った非常に高級なもの、色や機能がつけられたもの、木粉系原料を合成糊で固め合成香料だけで作られたもの、など多くの種類があるという〔鳥毛 2013〕。本稿のテーマである粘結剤については後述する。

線香の製造工程については、工程の名称などが産地によってわずかに異なる程度であり、ほとんど同じである。明治末年から大正にかけて、攪拌機・押し出し機が導入されて加工技術に若干の変化があったが、昭和中期に至るまで同様の手作業でおこなってきた〔堺市経済部商工課 1963〕。現在の製造工程も基本的には同じである〔鳥毛 2013、愛知県線香卸商組合 2015〕。ここでは一例として、昭和 38 年（1963）の『堺市の線香産業』に記載されている原料の部分を引用しておく〔堺市経済部商工課 1963〕。なお、工程の説明文については筆者の要約である。

・原料の保管

・原料の調合      各種の原料を配合する。

・ふるい      調合の終わった原料を簡単なふるい器にかける。

・煉り    荒煉り      原料に熱湯をかけて煉る（写真 1）。

煉り上げ    煉り終わった原料  
をいくつかの玉に  
分ける。

・玉揚げ

玉かこい    熱のとれた玉を玉  
かこいという容器  
に保管。

切取り      玉を押し出し機に  
入れる大きさに切  
取る。

・押し出し

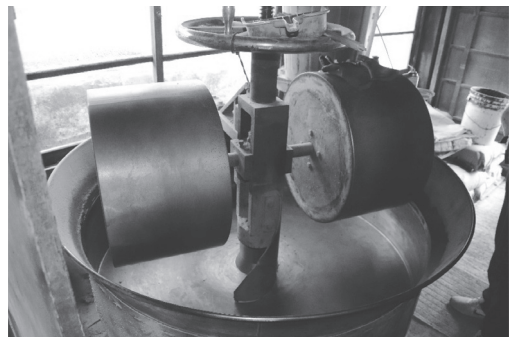


写真 1 練り機・攪拌機（福岡県八女市、2019 年撮影）

- 押し出し 玉を押し出し機に入れ、油圧により上から圧縮し、下部にあてた銅の巢金の穴から生地をそうめん状に 50 ～ 80 本押し出す。
- 盆切り 押し出された生地を盆板で受けて、へらで切り落とす（写真 2）。
- ・ 生 盆板に並べられた生地を板の上に並べて両端を切り落とす。
- ・ 乾燥
- ・ 結束 線香を束にして紙の帯でまとめる。
- ・ 包装

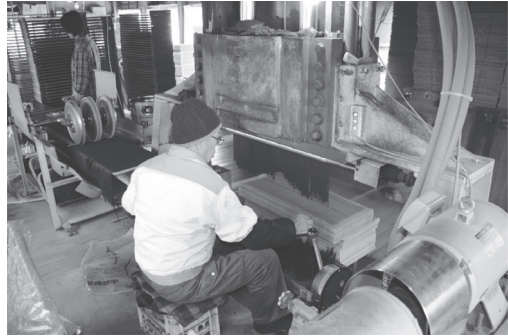


写真 2 盆切り（福岡県八女市、2019 年撮影）

### 第 3 章 蚊取り線香の歴史

蚊取り線香の登場は明治時代になってからであった。明治 18 年（1885）ごろ、ヨーロッパおよびアメリカから除虫菊が渡来し、和歌山県有田地方を中心に除虫菊栽培が開始され、除虫菊を用いた製品が開発されていった<sup>(2)</sup>。明治 20 年代初めから、除虫菊を乾燥して粉にしたのみ取り粉が製造されるようになり、堺の線香業者の技術も取り入れて、棒状の蚊取り線香が試作された。明治後期には、燃焼時間を長くするために渦巻状の蚊取り線香も発明された。ただし、明治時代には、除虫菊粉、のみ取り粉の製造販売が中心で、蚊取り線香の製造が本格化したのは大正時代になってからであった。和歌山県有田地方では、大正 9 年前後に複数の除虫菊業者が株式会社化し、本格的に蚊取り線香製造を始めている〔森川 1966、有田市誌編集委員会 1974、御前 2002 など〕。その後、蚊取り線香の製造・供給が拡大していった昭和 40 年代前半でも蚊取り線香の全国生産額の 8 割以上が和歌山県であった〔小川 1970〕。昭和 40 年代から 50 年代にかけては、大手各社が宣伝活動に力を入れ、製薬会社が線香販売をおこない、線香のみならず線香製造機・原料の輸出が活発化した。しかし、昭和 50 年代以降は、さまざまな殺虫剤の登場や、蚊取り線香の海外での製造などにより、国内での蚊取り線香生産は減少傾向にある。

## 第4章 昭和初期における蚊取り線香の原料と製造工程

蚊取り線香の製造工程については、線香製造の工程に類似している。とくに、大正から昭和初期にかけての時期にはほぼ同じであった。渦巻状の蚊取り線香を作る場合は、最後の過程で、手作業で渦巻状にすることを追加する程度の違いであった。

大正時代に、和歌山県内務部は除虫菊産業を調査するなかで、蚊取り線香の製造工程にも触れているが、簡単な記述となっている〔崎山 1913、和歌山県内務部 1925〕。大正時代の原料と製造工程をまとめたものとしては、内務省衛生試験所の刈米達夫がまとめた文章がある〔刈米 1925〕。以下に該当部分を引用しておく（写真 3）。

蚊遣り線香は好何にして製造するかといへば、其方法及び原料の配合は各製造所の秘密であつて皆異なつて居るが、大体の原則に於ては極めて簡単である。即ち左記原料を混合し熱湯を注いで十分に捏り、之を圧搾機に入れて線状に絞り出すのである。

杉粉（杉の葉を乾燥し粉末にしたもの）

除虫菊花粉末

除虫菊茎粉（除虫菊の茎葉を粉末にしたもの）

タブ粉又は生麩

杉粉は杉の葉を乾燥し粉末にしたもので、気発油を含有する為、燃焼を助けるもので仏用の線香には必ず配合せられるが蚊遣り線香には之を加へない場合もある。タブ粉といふのは樟科植物のタブノキ（或はヤブニクケイともいふ）の皮を粉末にしたもので多量の粘液を含有し、線香を固める為の結合剤である。生麩糊を以て代用する時は線香が堅くなり折れにくい点は甚だ宜しいが火付きが悪く又煙に少し焦臭を帯びる故上等の品にはタブ粉を用ひる。線香を緑色に染めるには青竹（マラカイトグリーン）といふ染料を用ひる。

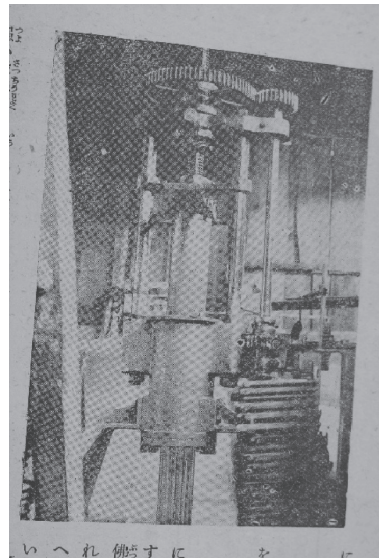


写真 3 『科学知識』掲載の刈米報告（蚊取り線香の圧搾機・押し出し機の写真）



刈米の文章からは、殺虫成分である除虫菊だけではなく、蚊取り線香原料の全体像がよく分かる。粘結剤としてタブ粉が使用されていることもうかがえる。

なお、この文章が載っている『科学知識』の巻頭には、「蚊遣り線香の原料シロバナムシヨケギクの栽培 和歌山県有田郡に於ける除虫菊の栽培」という口絵写真が掲載されている。女性が除虫菊を摘み取り、男性が天秤棒で摘み取った除虫菊を運搬する様子が撮影されている（写真4）。男性たちが着ているのは㊥という商標の入った山彦除虫菊株式会社のはっぴである。当時、山彦除虫菊は大手の蚊取り線香会社であった〔三和インセクティサイド社史編纂委員会 2019〕。刈米達夫は山彦除虫菊で調査した内容を書いている可能性がある。

また、昭和6年（1931）には、紅華堂駆虫薬工業所（現在の大阪府岸和田市内畑町）の藤原雅一が『蚊とり線香並除虫菊製品一般製造法』を発行し、蚊取り線香の原料・製造方法・製造機械などを詳細に紹介している〔藤原 1931〕。このなかで、以下のような一文がある。



写真4 『科学知識』掲載の口絵写真（和歌山県有田地方の除虫菊畑）

蚊とり線香の主要原料は除虫菊粉であつて良質の線香に於ては全量の約七割を占め、残余の三割が粘着力を付与する為に加へる粘料及着色料その他である。着色料は量としては極めて僅少で全量の千分の五を出ず、尚この外に黴止めの目的で、或は火付きをよくする目的で各々適當のものを混合する（後略）

明治時代以降、蚊取り線香原料は試行錯誤が繰り返され、また、製造所ごとに差異があった。ただし、ピレトリンという殺虫成分が含まれている除虫菊は必須であり、約7割を占める最重要の原料であった。この除虫菊に次いで重要なのが粘結剤であるという。粘結剤については本稿の中心テーマであるため後述する。

蚊取り線香の製造については、昭和20年代に大きく転換している。ひとつは、昭和10年代に発明された渦巻線香打ち抜き機が本格的に導入されていったことで

ある。もうひとつは合成ピレスロイドが開発され、除虫菊を主原料として製造していた蚊取り線香が化学合成品を用いて製造されるようになったという点である。しかしながら、合成ピレスロイドが使用されるようになって以降も、原料として粘結剤や増量剤は必要であった。

昭和50年代後半になると、 $\alpha$ デンプンなどの化学糊が普及するようになり、安く安定的に原料が調達できる時代になっていった。現在の蚊取り線香の原料は、合成ピレスロイド以外に、 $\alpha$ デンプン・ココナツ粉・木粉・除虫菊粕粉・シヤム粉・タブ粉などを使っている。除虫菊粕粉は殺虫成分として入れるわけではなく、木粉・ココナツ粉などとともに増量剤として入れている。 $\alpha$ デンプン・シヤム粉はタブ粉と同様に粘結剤として使用している〔三和インセクティサイド社史編纂委員会2019〕。

## 第5章 線香・蚊取り線香に利用するタブ粉

### 第1節 タブの樹皮粉と葉粉

線香・蚊取り線香原料としてのタブ粉利用の変遷をたどる前に、樹皮粉と葉粉の違いについてまとめておきたい。文献にはタブ粉と書かれているものも多いが、厳密に言えば、樹皮粉と葉粉に分けられる（写真5）。樹皮粉はおもに線香、葉粉はおもに蚊取り線香に使用されてきた。タブ粉の区分については、昭和11年（1936）に九州南部のタブ粉生産についてまとめた重松らの報告が詳しい〔重松ら1936〕。タブ粉としては「梔葉粉（葉粉）」、「梔樹皮粉（本粉）」の2種類があると区別し、産地としては「梔皮粉は大部分を九州地方で産し特に鹿児島県大隅並び



写真5 採取されたタブの葉（福岡県八女市、2019年撮影）

に宮崎県飫肥の両地方が著名」、「梔葉粉は前記両地方の他に福岡県八女地方・熊本県球磨川沿岸・徳島・和歌山・島根の諸県から」、「杉葉粉は福岡県八女地方・和歌山・兵庫・栃木の各県から」と記している。このほか、「台湾粉或は支那粉とは台

湾又は南清地方の楠類の樹皮粉で内地物に比して極めて粘質が大である。」とし、「採皮用樹種はタブ、ヤブニクケイ、カゴノキ、イヌガシ、アラガシ、アラカゴノキ等が用ひられ、台湾粉原料には台湾のニホヒタブ、オホバタブ、タイワンタブ等で就中ニホヒタブが最も賞用せられてゐる。」という。樹皮粉の場合、同じタブでも区別しているだけでなく、類似した樹木の樹皮も用いられていたようである。

重松らは、タブの楠皮粉と葉粉についての使い分けについても記述している。「楠皮粉（本粉と言ふ）の線香は高級品に属し仏前燻香用とせられ亦抹香にも供せらる。即ち粉末は香気に富み燻焼して頗る芳香を發散すること、水で練つた時粘質に富み添加香料の香気をよく吸収保持する等の特性あるを以て自から高級原料たるの条件を具備してゐる。」と述べており、樹皮粉のほうが高級原料であり、本粉と呼ばれていることも記している。本粉という名称は、おそらく、タブの葉粉よりも樹皮粉のほうが本来のものである、ということを示しているように思われる。

さらに、重松らはこのようなタブの樹皮粉、タブの葉粉の調査をもとに、「或る製造業者が採用せる調合の一例」を示している。

墓場用線香には杉葉粉八 楠葉粉二。仏前用又は遊郭用線香は杉葉粉四 楠皮粉三 楠葉粉三。仏前用燻香線香は楠皮粉七・五 台湾粉（又は支那粉）〇・七 楠葉粉一・四、香料〇・四。蚊取線香には楠葉粉三 除虫菊粉四・五 雜粉二・五の如き割合

昭和初期の線香の種類を区別して、それぞれに原料の配分が異なること、高価な線香にはタブ樹皮粉が多く用いられ、安価な線香および蚊取り線香にタブ葉粉が多く用いられていることを示している。

## 第2節 江戸時代の粘結剤

明の李時珍の『本草綱目』には、さまざまな種類の香料に、楡の皮の粉末を糊として混ぜて線香を作る、と記されている。19世紀半ば（日本の江戸末期）には、台湾でタブの樹皮粉生産が盛んにおこなわれていたという記録も残っている〔金平1918〕。しかし、日本における線香の粘結剤に関する古い文献はあまり残っていない



い。今のところ、18世紀前半に成立したと思われる『皇方物産誌』の巻四に、「タモ 一名タブ」として、「下品ノ線香ニ此皮ヲ多用フ」と記載されているのを見出した程度である<sup>(3)</sup>。このほか、文化14年（1817）の肥後国人吉藩の林制史料のなかに「たふ粉」という記述があること〔熊本大林区署編1922〕、安永7年（1778）には紀伊国田辺でも江戸末期に「抹香皮」が取り引きされていること（『田辺町大帳』安永7年8月11日）、などを確認している。タブの樹皮粉が線香原料として使用されていたことが推測できるものの、詳細は不明である。なお、江戸時代におけるタブの葉粉生産に関する記録は見つかっていない。

### 第3節 明治時代のタブ葉粉生産

明治時代後期になると、福岡県・和歌山県・三重県などで線香原料としてのタブ葉粉の生産がおこなわれていたことが確認できる。しかし、いずれの地域でも、明治時代には線香原料としてのスギ粉生産が中心であり、タブ粉の生産量はわずかであった〔藤井2021b〕。なお、線香原料としてのタブ粉・スギ粉生産は、水車の動力（昭和初期以降はタービン水車も普及）を用いて杵（搗き臼機械）を動かし、粉にする作業工程が基本であった（写真6）。

先述した重松らの報告には、タブ葉粉について以下のような記述がある〔重松ら1936〕。

梔の樹葉粉が線香原料に供せらるるやうになつたのは明治初年福岡県八女郡にてこれが創められたと唱へられ、当初は杉粉に較べて使用量が極めて僅少で

あつて、謂ば杉粉原料に粘質を付与する糊粉の程度に過ぎなかつたが、明治二十三年頃に蚊取線香の発明あり、爾来頓に其使用が激増して目下では九州地方が梔葉粉の全国的需要に対する供給地になつてゐる。彼の杉粉線香製造に於ては従来糊料として布糊や或種の葉草を使用し来つたが、其れでは高価につき



写真6 胴つきで製粉されるタブ粉（福岡県八女市、2019年撮影）

亦線香が余り堅過ぎて折損し易い欠点があるので、之に楠葉粉を代用することになってからは此二点を完全に補足したのみならず更に付帯利益として線香原料の容量を増大すること、火持時間を延長すること等が存在する。

重松らによると、タブの樹皮粉に対して、葉粉のほうは明治初年から用いられるようになったもので、当初はスギ粉に糊分を与える程度の使用量であったという。ところが、蚊取り線香の原料に使用されるようになって、タブ葉粉の製造が激増した、としている。なお、蚊取り線香の発明は明治 23 年ごろといわれているが、先述したように本格的な製造が始まったのは明治末期から大正時代になってからであった。重松らは単に樹皮粉の代用品として葉粉が使用されるようになったのではなく、その他の糊材に比べると利点が多いという点にも触れている。

ただし、蚊取り線香の粘結剤として、当初からタブ粉が使用されてたわけではなかった。明治 20 年代以降、各地でさまざまな蚊取り線香の試作がおこなわれていた。そのなかで、タブの樹皮粉やタブの葉粉を混合した人もいた。たとえば、明治 24 年に特許出願し、明治 35 年に特許取得している水島彌太郎は、「殺虫剤」の原料として「除虫菊三貫匁 大黃根五百匁 加密列五百匁 松葉一貫匁 楠皮四貫七百匁 楠葉三百匁を各粉末と成して混合」と記している〔藤原 1931〕。このような試作品は多数にのぼっており、水島の蚊取り線香は一般化することはなかったと思われる。

#### 第 4 節 大正時代のタブ葉粉利用

タブの樹皮粉・葉粉ともに生産が拡大してきたのは大正時代になってからであった。大正時代には、鹿児島県・宮崎県・熊本県などにおいて、次々とタブ粉生産の製粉場（線香水車）が設置されていった〔藤井 2021b〕。大正時代に九州を中心にタブ粉生産が拡大したひとつの要因は、線香原料に使用するタブ樹皮粉が増加したことであった。たとえば、兵庫県の淡路島では、大正初期から、タブ樹皮粉を利用するようになった〔浜岡 1988〕。ただし、線香の粘結剤としての使用量だけであれば、全国的な増産にはつながらなかったと考えられる。重松らの報告にあるように〔重松ら 1936〕、タブ粉生産が拡大した大きな要因は、蚊取り線香産業の急速な発

展によって使用量が激増したためと考えられる<sup>(4)</sup>。

ただし、大正時代初期には、タブ粉は蚊取り線香の粘結剤として広まっていたようである。大正2年（1913）に和歌山県内務部が発行した『紀州の除虫菊』には、「茎葉碎粉法及其の利用」のなかで「参考」として「蚊遣及線香製法」が取り上げられている〔崎山1913〕。

蚊遣及線香製法は二番粕に茎葉粉、麦粉、鋸屑等の燻煙物を加へ細長き小紙袋に入れ一端に点火せしむるものとす。形は懷炉灰の如くす。又布海苔にて煉り合し線香を製す。此の際除虫菊粉の純良なるもの少量を加ふれば一層有効にして上品を得べし。（有田郡保田村上山英一郎）

上山英一郎は、有田地方において、除虫菊栽培を伝来当初から着手および啓蒙し、いち早く蚊取り線香の開発もおこない、大正8年（1919）に大日本除虫菊株式会社（通称：金鳥）を立ち上げた人物である。この文献によると、上山英一郎の場合、大正初年には粘結剤としてはまだタブ粉を使用していなかったことがうかがえる。また、大正14年（1925）に和歌山県内務部が発行した『副業参考資料の一 除虫菊に関する調査』には、参考として岡山県における蚊取り線香製造の状況を記している〔和歌山県内務部1925〕。

原料の配合 本製造の原料の配合は最も秘中の秘とする所にして若し之れを同業者間に発表せんか恰も敵に武器を与ふるに等しき為め配合の割合は決して発表せず然れども除虫菊の精撰せざるもの及若干の茎葉粉末に糊粉（山肉桂又は「ヤブニッケイ」の葉を粉末とせるものにして粘力に富む）を混合せるものにして糊は普通除虫菊原料の一割五分乃至二割とす

ここでも、タブ粉は明記されていないが、重松らが樹皮粉としてあげていたヤブニッケイを糊粉に使用している。なお、和歌山県古座川流域の製粉場（線香水車）では、大正ごろに、蚊取り線香会社の依頼で試験的にヤマニッケイをつくことがあったという。蚊取り線香会社が粘着剤としての糊粉を試行錯誤していたことがうか

がえる〔藤井 2021c〕。

各蚊取り線香会社において、いつからタブ粉を使用し始めたのかは明らかではない<sup>(5)</sup>。そもそも現在まで存続している大手会社以外はほとんど史料が残っていない。また、蚊取り線香業界全体の創業期において、会社間でそれぞれ配合原料や配合割合を試行錯誤していたため、自社のデータ公表を望んでいなかったことも影響していると思われる。ただし、先述したように、大正 14 年の刈米の文章には、タブ葉粉の使用が記載され、昭和 6 年の『蚊とり線香並除虫菊製品一般製造法』には最も適当な糊分としてタブ葉粉を高く評価していることから考えると、大正後半から一部の和歌山県の蚊取り線香会社で使用され始め、昭和初年にはその他の同業者にもタブ葉粉の価値が伝わり、蚊取り線香製造において欠かせない粘結剤となっていたと思われる。

## 第 5 節 昭和初期におけるタブ粉生産・利用の普及

昭和初年には、蚊取り線香業界において、粘結剤としてのタブ葉粉利用が急速に普及したようである。昭和 6 年の『蚊とり線香並除虫菊製品一般製造法』には、蚊取り線香の粘料について詳しく書かれた箇所がある〔藤原 1931〕。これによると、当時の蚊取り線香業界において、タブ葉粉が重要視されていたことがうかがえる。『蚊とり線香並除虫菊製品一般製造法』をまとめた藤原雅一は、先述したように、現在の大阪府岸和田市において紅華堂駆虫薬工業所という蚊取り線香製造会社を営んでいた人物であった。

「第二編 原料」「第二章 粘料」の一部を引用すると、「除虫菊粉以外のものの中で最も重要なのは粘料である。粘料の品質が不良であれば粘力弱く作業が困難となり、粘力を増大する為に之を多量に用ふると、主要成分たる除虫菊粉の含有量が自然低下して製品の殺虫効果を減殺するから、出来る限り優良なる品質の粘料を使用すべきである。」といい、「現今、線香製造に用ひられる粘料としては最も重要なものは梔粉であつて、その他に台湾粉、黄蜀葵根、黄蘗等がある。」と記している。そのうえで、「梔粉」という項目を立てて以下のように記している。

梔粉 たぶの木「梔の木」(Var.Jaucescens)は我国では四国の一部、九州、

琉球、台湾等の暖地に自生する樟科に属する常緑の喬木であつて、幹の高さ四五十尺に達し、葉は長倒卵形若くは長橢円形であつて厚く、その一端は狭くなつて葉柄に続いてゐる。葉には光沢がある。「いぬぐす」「犬樟」*Machilus Thunbergii* の一変種である。梔粉は即ち梔の樹葉を乾燥粉末としたもので、湯で以て練れば粘力を生じ、蚊とり線香の粘料として最も適當である。又その小枝等の薄い皮は粉碎すれば粘力を生じ台湾粉なる名称で用ひられ、樹幹の厚い皮は同様粉碎して本粉なる名の下に薫物線香の原料（粘料に非ず）として用ひられる。

さらに、「黄蜀葵根」という項目には、「著者の経験に依れば、第一梔粉に比して高価であり、特許条文に反して却つて黴を生じ易く、線香乾燥に際して線香の収縮を起す事甚しい為火付き悪く立消の原因となるなど、色々不利な点があつて実用価値に於て遙に梔粉に及ばない。」としている。また、台湾粉については「台湾粉は梔粉の項に述べた如く梔の木の薄皮を粉末としたもので、上等の薫香の粘料として用ひられるが、安価な薫香或は蚊とり線香にはあまり用ひられない。蚊とり線香で台湾粉を粘料として用ひたものは、乾燥に際し収縮甚しく、且つ製造の際にも線香地が柔軟となり取扱困難である。」と記している。さらにその他の粘結剤について、「以上の他に米粉、メリケン粉、アラビヤゴム、布海苔等のやうな粘料があるけれども、是等は何れも他物に付着する性質が強いから使用上不便が多い。線香の粘料としては、自体内に原料を包蔵し、他物に付着しない性質のものでなければならない。」とも記している。

昭和初期には、内務省衛生試験所の刈米達夫もタブ粉に関して、大日本山林会の会誌『山林』などに貴重な証言を残している。先述のように、刈米は大正14年に蚊取り線香について報告を書いていた人物である〔刈米 1925〕。

昭和6年（1931）9月の『山林』586号に掲載した「山野に自生する薬用植物」のなかには以下の一文がある〔刈米 1931a〕。

タブノキ 概して暖地に産する樟科の喬木で、その樹皮を粉末にしたものをタブ粉と称し、線香の製造には欠くべからざるものとなつてゐる。即ち線香の



結合剤に用ひるのである。蚊取線香等には寧ろタブの木の葉の粉末を用ひる。現在主として福岡県、宮崎県、和歌山県等より供給せられてゐる。線香の安価品には之を用ひないで、生麩糊を用ひるが、中等品以上は必ず之を用ひるから、相当多量の需要がある。タブ粉に水を加へて攪拌すると粘稠な粘液を生じる。婦人の髪の癖直しに用ひるビナンカヅラは支那産の同属植物である。この他に線香の原料として多量に消費されるのは、杉の葉の粉末である。之れはスギ粉と称し、仏事用線香の原料に用ひる。

昭和6年9月に発行された和歌山県山林会機関誌の『木の国山林時報』76号にもまったく同じ文章が掲載されている〔刈米 1931b〕。また、昭和8年11月発行の静岡県山林会機関誌の『林業』168号にも同じ文章が掲載されている〔刈米 1933〕。昭和初期には各県の山林会では、特種樹種・特用林産物の奨励を勧めていたため、参考になりそうな文章を各県山林会の機関誌で転載していたと考えられる。

昭和7年（1932）7月の『山林』596号には、同年2月に東京赤坂で開催された特用樹種栽培奨励座談会（第2回）が掲載されているが、この座談会のなかで刈米はタブについても発言をしている〔刈米ら 1932a〕。昭和7年7月発行の『木の国山林時報』83号にもほぼ同じ文章が掲載されている〔刈米ら 1932b〕。以下は『山林』596号より引用する。

それからタブノキ、之は直接、葉には用ひませんが薬用に関係のあるものでありまして、線香の繋ぎ、線香の粘料になります。一本一銭などと云ふ安い線香は杉の葉の粉末を生麩糊で固めたものですが、之を燃やして見ると焦げ臭い臭ひがするし、余り硬く固まり過ぎて線香が立消えします。さうして乾いたものが折れ易い。所が此タブノキの皮を繋ぎに使つた線香は、燃して臭ひもせず立消えもしないと云ふやうな良い点があるので上等の線香にはタブノキの皮の粉末を使ひます。之をタブ粉と申して居ります。之は九州殊に宮崎県の方面で、タブノキで木炭を造りますが其時の副産物に皮を剥いで之を市場に出します。例へば京都の鳩居堂などでは相当に之を用ひますが全部九州の品です。之は産地に於て三階級に區別して、土上即ち根元から二間以上の皮を真別と云つ

て、之が値段が一番高く十貫目十円ぐらゐです。詰まり粘液が一番多いのです。中間の所が別製と申して十貫目八円ぐらゐ。根元の粘液の少い所は本極と云つて十貫目六円ぐらゐです。さう云ふ風にして皮を線香の材料に使ひますが、タブノキの葉の粉末も矢張り利用されて、之は糊粉と申してモット安い線香例へば蚊取線香の繋ぎには専ら葉の粉末の方を使ひます。之は皮の方の粉末の値段の半分ぐらゐです。

この刈米の発言は、「森林薬用植物」に関して、大日本山林会の司会者より「皮切り」を求められたことに対応したものであった。刈米は薬学博士であり、大正時代より薬用植物の研究をおこなってきた。したがって、先述の「山野に自生する薬用植物」と同様、薬用植物という枠組みで発言されたものである。ただし、昭和初期は、大日本山林会・各地の山林会が中心になって、農山村の副業として、棕櫚・櫨・漆・栗など、特用樹種の栽培が推奨されていた時期であった。タブの樹皮粉・葉粉が農山村の副収入として重要視され、その生産が推奨されはじめていたことがうかがえる。

以上2点の刈米の説明をまとめると、タブの樹皮粉と葉粉は使い分けがなされていたこと、樹皮粉のほうが値段は高いこと、樹皮粉にも等級があること、蚊取り線香は葉粉を使っていること、などが分かる。

その後、昭和12年(1937)に刊行された『特用林産及林産加工』には、「第一編 木竹材の理学的利用及び特殊産物」「第四章 樹皮」のなかに、「線香とタブ樹皮」という項目があげられている〔藺部ら1937〕。この項目は、『山林』に紹介されている刈米達夫の文章をもとにまとめられたものであった。

以上のように、昭和初期には、蚊取り線香業者だけではなく、大日本山林会・各地の山林会がタブ粉利用に関する啓蒙活動を展開していた。大日本山林会が流した林業ニュースでも、「タブの木の皮と葉の利用」(昭和11年4月12日放送)〔大日本山林会1936〕、「農山村の副業線香原料の製造」(昭和15年4月16日放送)〔大日本山林会1940〕などが取り上げられていた。前者は、後述する重松らの報告内容(産地や生産額)を短く紹介しつつ、熊本県菊池郡龍門村(現在の菊池市)にタブの葉の製粉場ができたことも取り上げ、「同村の経済更生上に好影響を齎してゐ

る」としている。後者は、福岡県八女地方におけるタブ粉とスギ粉の生産量・生産額について簡単に紹介している。タブ粉・スギ粉のおもな仕向地は岡山・兵庫・和歌山・大阪で、昭和14年ごろにはタブ粉はスギ粉の約三・六倍の価格であり、「輸出品である除虫菊線香等の活況につれて、梔粉は非常に需要多く原料不足の状態」となっていた。昭和10年代前半には、蚊取り線香の糊分としてタブ粉需要が激増していたことを背景に、八女地方のタブ粉の生産量が増加し、価格が高騰していたことがうかがえる。筆者が把握している事例では、明治時代より線香原料を製粉していた和歌山県古座川流域の製粉場（線香水車）では、大正中期ごろまではスギ粉生産が中心であったが、大正末期よりタブ粉生産が増加し始め、昭和初期になるとタブ粉が中心となっていた〔藤井 2021c〕。

このようにタブ粉が注目されていた昭和11年（1936）に、タブ粉の有力な産地の宮崎県からの報告が大日本山林会の機関誌『山林』640号に掲載された。宮崎県の宮崎高等農林学校の重松義則らがまとめた「線香原料の梔樹葉皮粉の製造」であった〔重松ら 1936〕。筆者が調査した限りでは、タブ粉に関する最も詳しい内容を記したものであるため、本稿においてもすでにしばしば引用してきた。この報告は、「山村副業奨励の参考」にするため、宮崎県を中心とする調査によってまとめたものであった。

重松らとほぼ同時期、昭和12年（1937）に鹿児島県大根占営林署は、同県肝属郡小根占村川北（現在の南大隅町根占川北）の三浦伊久馬の製粉所を調査し、タブ粉の生産状況を報告している〔熊本営林署 1938〕。この報告でも、「樹皮は神仏用線香原料たる所謂本粉」であって、品質により3種類に分類されるとしている。①甲種は皮が薄く、原木若木であり、大分県地方に多い。②乙種は皮が厚く、生産量が最も多い。生産地は鹿児島県肝属郡・熊毛郡、宮崎県西諸県郡・南那珂郡である。③丙種は老木より採取し、①②に比べると品質は劣る。「葉は蚊取線香原料たる所謂「のり粉」の代用原料なり。」と記している。

このように、昭和初期には、九州を中心にタブ粉の生産が活発化し、大日本山林会・各地の山林会がタブ粉利用に関する啓蒙活動を展開していた。この背景としては、大正末期から昭和初期にかけて急速に発展した蚊取り線香業界のなかで、粘結剤としてのタブ粉の価値が高まり、全国各地にタブ粉を求める動きが活発化したた

めであった。和歌山県の蚊取り線香会社は九州までタブ粉を求めて買い付けに出かけ、なかには移住して製粉をおこなう者も現れた〔藤井 2021b〕。

一方、あまり史料は残っていないが、タブ粉は線香の粘結剤としても重要になっていた。兵庫県の淡路島の記録では、糊分の品目としては、昭和12年（1937）に支那粉、特製糊粉、並糊粉、特等台湾粉、台湾粉、昭和13年に支那粉、特製糊粉、特等台湾粉、台湾粉、昭和14年に支那粉、特製糊粉、特等台湾粉、羅粘粉、という名前が確認できる〔浜岡 1988〕。現在の線香製造や、昭和中期の堺の線香を参考にすると、特製糊粉はタブ樹皮粉、並糊粉はタブ葉粉と推定できる。なお、淡路島で九州産のタブの樹皮粉が使用されるようになったのが大正初年からであり、それまではおもにスギを使用していたという〔浜岡 1988〕。なお、スギ葉を主原料とする杉線香においては、もともとタブ粉を使用することは限定的であったようである。とくに東日本では自生するタブが多くなかったこともあり、昭和初期ごろまではあまり粘結剤としてのタブ粉は使用していなかったようである。たとえば栃木県の今市では、スギ葉を採取する時期を工夫することで、スギ葉から粘りを得て糊粉は使用していなかった〔黒岩ら 1980〕。

## 第6節 昭和中期～後期のタブ粉需要

先述したように、昭和20年代には蚊取り線香には除虫菊に代わって合成ピレスロイドが使用されるようになった。しかし、粘結剤としてのタブ粉の需要は依然として高かった。昭和30年代から50年代にかけての時期は、蚊取り線香会社、および原料商売会社が競ってタブ粉を求めていた。蚊取り線香会社、原料会社にとって、タブ粉を確保することは重要な仕事であった〔三和インセクティサイド社史編集委員会 2019〕。

一方、線香会社においても、粘結剤としてのタブ粉は依然として重要であった。淡路島の線香では、昭和30年代にも糊分としてタブ樹皮粉、タブ葉粉、支那粉を使っている〔浜岡 1988〕。

昭和中期における堺での粘結剤としては以下のような記録が残っている〔堺市経済部商工課 1963〕。

ツナギ粉には梔（タブ）の木の葉、皮、楡の白皮の粉末、トビ粉（またはチリ粉と称するコンニャクの粉）等が使用されるが、無臭のものがよしとされ、沖縄、台湾のものが喜ばれ、粘着力を増すために白砂糖、黒砂糖、布海苔等が添加されることがある。

このほか、線香の用途によってタブ粉の使い分けについても記されている。「上級品は、梔の木の皮の粉末を本体に用いるが、ツナギには、ノリの粉は一種の嗅気があって香料を打消すので使用せず、普通支那粉といって無臭の楠の皮と思われるものを使用する。」「中級品は、無臭の梔の木の皮の粉末を本体にして、ツナギにはノリ粉と業者の俗称する梔の木の葉の粉末を用い、これに香料として先にあげたバイオレット、シップレー等の化学香料油を配合して添加した製品をさすのが普通である。」とある〔堺市経済部商工課 1963〕。支那粉、台湾粉と呼ばれるものについては、タブと同じような性質をもち、その粘着力はより強力である、とされている〔堺商工会議所・堺産業経済研究所 1970〕。支那粉、台湾粉については、タブの種類と考えられている〔横山 2013〕。

堺や淡路島の線香は、香料を入れた線香が主流であり、多様な種類の線香を製造してきたため、粘結剤についても粘度などによってさまざまな使い分けをしてきたことがうかがえる。

他方、杉線香の産地である静岡県天竜川流域では、スギ粉自身に粘りがあるために従来は粘結剤を使用していなかった。ところが、昭和中期ごろに粘結剤としてタブ粉を使用するようになり、大阪府堺市より購入しているという〔静岡県教育委員会 1989〕。また、栃木県今市でも、昭和中期にはスギ葉の粘りだけではなく、糊粉も使用するようになったという〔黒岩ら 1980〕。この糊粉はタブ粉のことと推測されるが確認できていない。茨城県の杉線香では、糊分としてタブの葉粉を使用するという〔柏 1980〕。とくに東日本のスギ線香産地では、昭和中期ごろにタブ粉を使用することも増えてきたと思われる。

## 第7節 現在

蚊取り線香業界では、先述したように、昭和後期以降は東南アジアからタブ粉が



輸入されるようになり、また  $\alpha$  デンプンなどの化学糊が普及するようになった。したがって、従来のようにタブ粉が必要ではなくなり、その結果、九州をはじめ国内でタブ粉生産を続けている製粉場はごくわずかとなった。現在でも蚊取り線香会社において国産のタブ粉を使用しているのは、長年にわたる製粉場との取り引きを重視し、また、原料にこだわりをもって蚊取り線香製造をおこなっている場合に限られている。

一方、現在の線香業界では、粘結剤としてタブの樹皮粉を使用することが基本とされている〔鳥毛 2013、愛知県線香卸商組合 2015〕。タブの樹皮を剥いて乾かして粉碎した粉に水を加えると粘性や弾性が出る。その糊分に木粉質の原料、炭などを加えて線香を成形するという。ただ、高級品になるほど安価な木粉系の原料の割合が少なくなり、粘性をもった糊材も極力少なく抑えられ、その代わりに香りのある原料を増やす。また、墓参用として使われることの多い杉線香は、スギの小枝と葉を主原料とし、糊分が少ないためにタブの葉や布海苔を少量加え、それ以外の香料は使用しない〔鳥毛 2013〕。現在の線香業界では、タブの樹皮粉が基本で、タブの葉粉は杉線香に糊分として使用する程度のものである。なお、茨城県で線香製造をおこなっている業者のなかには、スギの粘りにこだわりをもち、現在でもスギ以外の原料は使用していない、というところもある（「杉線香づくり 100 年 駒村道廣」）。

## 第6章 まとめ

本稿で明らかになった要点をまとめると以下ようになる。線香の粘結剤としては、江戸時代からタブの樹皮粉が使用され始めた可能性がある。明治時代になると、タブの葉粉が九州や紀伊半島で生産され、おもに線香の粘結剤として利用されていた。大正末期から昭和初期になると、九州にはタブ粉の製粉場（線香水車）が多数設置され、タブの樹皮粉・葉粉の生産が拡大した。この時期にタブ粉生産が拡大した要因は、蚊取り線香業界が発展し、粘結剤としてのタブの葉粉需要が増加したためであった。蚊取り線香業界がタブ粉を求める動きを活発化させただけでなく、農山村の副業としての特用植物栽培に力を入れていた国や都道府県の山林会も、タブ粉生産について単行本、会誌、ラジオのニュースなどで宣伝した。昭和

期から後期にかけての時期にも、蚊取り線香の粘結剤としてのタブ葉粉の需要は依然として高かった。蚊取り線香会社や原料会社は競い合ってタブ粉を買い求めた。線香会社も引き続きタブの樹皮粉を中心に葉粉も必要とした。平成以降になると、蚊取り線香の粘結剤としては、東南アジアから輸入されるタブ粉や  $\alpha$  デンプンなどが用いられることが主流になった。また、国内のタブ粉生産者が減少して、国産タブ粉を確保することが困難になった。線香の粘結剤としての樹皮粉も輸入物が多くなっているようである。

粘結剤としてのタブ粉には、これまであまり光が当てられることがなかったが、線香・蚊取り線香産業にとっては重要な原料であることが明らかとなった。しかし、とくに大正から昭和中期ごろに需要が高まり、生産者・生産量が増加したことも分かってきた。今後は、タブ粉生産の拠点であった九州や、蚊取り線香産業の拠点であった和歌山県におけるタブ粉生産について検討していく予定である。

---

<sup>(1)</sup> 筆者は、田中源一商店から発展した三和インセクティサイド（和歌山県有田市）の社史を編纂させていただいた〔三和インセクティサイド社史編纂委員会 2019〕。編纂過程において、三和インセクティサイドの田中源一郎会長をはじめとして会社関係者に聞き取りをおこなった。この編纂事業において、従来ほぼ紹介されたことはなかった蚊取り線香の原料商売の一端に光を当てることができた。なお、令和元年（2019）10月、三和インセクティサイドは、ライオンケミカルに統合した。ライオンケミカルは、明治以来の起源をもつ除虫菊関連会社が統合して成立した古い会社であるが、平成11年（1999）に三和グループとなっていた。

<sup>(2)</sup> 除虫菊の原産地は、当時のオーストリア＝ハンガリー帝国のダルマチア地方といわれている。和歌山県有田地方では、明治18年から19年にかけて、ダルマチアから入ってきた除虫菊の種を栽培した人たちと、アメリカから入ってきた除虫菊の種を栽培するようになった人がいた。前者は、現在のライオンケミカルの創業者の1人である御前七郎右衛門らであり、後者は大日本除虫菊（金鳥）の創業者の上山英一郎であった。除虫菊栽培の元祖については諸説あるが、地元の有田地方では元祖を1人の人物に特定せず、御前や上山など複数の先人たちを創業者群とする見方がある〔森川 1966〕。

- (3) 『皇方物産誌』は、本草学者の稲生若水（1655-1715）が編纂し、弟子の内山覚仲（覚順）（1673-1742）が完成させたと思われる〔東京植物学会 1909、太田 2016〕。
- (4) 三和インセクティサイドの田中源一郎氏は、仏壇用の線香は小さいため原料はキロ単位であるが、蚊取り線香はトン単位の原料が必要になる、と語る。線香用の粘結剤利用のみではタブ粉の需要は激増することはなかったと思われる。
- (5) あとの時代から当時を振り返った記録としては以下のような記述がある。明治 20 年代の蚊取り線香開発当初のこととして、大日本除虫菊の社史には「当時の製法は、除虫菊粉に糊粉と蜜柑の皮の乾燥粉を加えて十分に練り」と記されている〔大日本除虫菊株式会社社史編纂室 1988〕。また、同じく有田市においてキング除虫菊を経営してきた森川仙太は、自分が業界に入った大正 9 年ごろのこととして、「蚊とり線香の製法は、もとは除虫菊の粉末に粘着剤として、タブ楠の葉の粉末と、燃焼を助けるため多少の増量剤を加えマラカイト・グリーン（青竹）で着色した水を加えてよく練り、それをタンポに入れて、油圧によって棒状に押し出し」と述べている〔森川 1966〕。

#### （参考文献）

- 愛知県線香卸商組合編 2015 『よくわかるお香と線香の教科書 お香マスターが答えるお香の疑問 70』 三恵社
- 有田市誌編集委員会編 1974 『有田市誌』 有田市
- 安藤精一 1993 「近世田辺の町方商業 一座について」 安藤精一編『都市史の研究 紀州田辺』 清文堂出版
- 太田由佳 2016 「『庶物類纂』編纂史の再検討」『近世京都』2
- 小川伊三郎編 1970 『和歌山県の産業』 “和歌山県の産業” 編さん本部
- 御前明良 2002 「除虫菊の栽培史と蚊取線香 その一」『経済理論』306
- 御前明良 2004 「除虫菊の栽培史と蚊取線香 その二」『経済理論』319
- 御前明良 2020 『除虫菊と蚊取り線香 一上山英一郎翁の先見性と地域産業への貢献一』 私家版
- 柏順子 1980 『杉線香の話 一片隅に残る伝統産業一』 筑波書林
- 金平亮三 1918 『台湾有用樹木誌』 晃文館
- 刈米達夫 1925 「蚊遣り線香と蚤取り粉」『科学知識』5 - 8

- 刈米達夫 1931a 「山野に自生する薬用植物」『山林』586
- 刈米達夫 1931b 「山野に自生する薬用植物」『木の国山林時報』76
- 刈米達夫ら 1932a 「特用樹種栽培奨励座談会（第二回）」『山林』596
- 刈米達夫ら 1932b 「特用樹種栽培奨励座談会 第二回 一」『木の国山林時報』83
- 刈米達夫 1933 「山野に自生する薬用植物」『林業』168（静岡県山林会）
- 熊本営林局編 1938 『管内の林産物に関係ある特殊産業の調査研究 18 シャリンバイ染料、タブ粉及び葛粉の製造』熊本営林局
- 熊本大林区署編 1922 『人吉藩林制沿革史』熊本大林区署
- 黒岩俊郎・玉置正美・前田清志編 1980 『日本の水車』ダイヤモンド社
- 堺市経済部商工課編 1963 『堺市の線香産業』堺線香組合
- 堺商工会議所・堺産業経済研究所編 1970 『特産品調査シリーズ VI 堺の線香産業』堺商工会議所・堺産業経済研究所
- 堺線香組合編 1961 『堺の薫物線香』堺線香組合
- 崎山信吉 1913 『紀州の除虫菊』和歌山県内務部
- 三和インセクティサイド社史編纂委員会編 2019 『三和インセクティサイド50年のあゆみ』三和インセクティサイド
- 重松義則・大平隆 1936 「線香原料の楡樹葉皮粉の製造」『山林』640
- 静岡県教育委員会編 1989 『静岡県文化財調査報告書 41 静岡県の諸職 ―静岡県諸職関係民俗文化財調査報告書―』静岡県教育委員会
- 蘭部一郎・三浦伊八郎編 1937 『特用林産及林産加工』明文堂
- 大日本山林会 1936 「林業ニュース 四月一二日放送 タブの木の皮と葉の利用」『山林』642
- 大日本山林会 1940 「林業ニュース 四月一六日放送 農山村の副業線香原料の製造」『山林』691
- 大日本除虫菊株式会社社史編纂室編 1988 『金鳥の百年 大日本除虫菊株式会社百年史』大日本除虫菊株式会社
- 東京植物学会 1909 「小野蘭山先生百年記念展覧会陳列品目録」『植物学雑誌』23-269
- 鳥毛逸平 2013 『香り選書 20 お線香の考現学 ―暮らしに根付くお線香の香り―』フレグランスジャーナル社

- 根本曾代子・刈米孝夫・廣川源治編 1982 『刈米達夫先生回想録』 廣川書店
- 浜岡きみ子 1967 「淡路一宮町の線香製造工業の考察」『兵庫史学』46
- 浜岡きみ子編 1988 『淡路いちのみやの香り ―特産線香―』 一宮町教育委員会
- 兵庫県立津名高等学校社会科研究部 1961 「淡路島における線香工業の実態」東洋大学経済学会編『郷土の自然と文化 ―高校生の見た日本の社会―』理想社
- 星野輝男 1982 「淡路島の線香製造業 ―伝統工業の1事例―」『兵庫地理』27
- 星野輝男 1985 「淡路島の線香製造業 ―伝統工業の1事例―」星野編『兵庫県の伝統工業と特産品』清水書院
- 藤井弘章 2021a 「線香原料製粉の歴史と民俗 ―和歌山県古座川流域・三栖家の製粉場（線香水車）と製粉工程―」『近畿大学総合文化研究科紀要 渾沌』18
- 藤井弘章 2021b 「タブ粉の歴史と民俗（仮）」『民俗文化』33（予定）
- 藤井弘章 2021c 「和歌山県古座川流域・三栖家の線香原料製粉業と線香製造業 ―明治・大正時代を中心に―（仮）」『和歌山地方史研究』（予定）
- 藤原雅一 1931 『蚊とり線香並除虫菊製品一般製造法』 紅華堂出版部
- 森川仙太 1966 『除虫菊と共に』 キング除虫菊工業株式会社
- 山形健介 2014 『ものと人間の文化史 165 タブノキ』 法政大学出版局
- 山田憲太郎 1978 『ものと人間の文化史 27 香料 日本のにおい』 法政大学出版局
- 横山智 2013 「線香粘結剤タブ粉のリソース・チェーン 日本と東南アジアの森林利用の相関」横山編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 4 資源と生業の地理学』海青社
- 和歌山県内務部編 1925 『副業参考資料の一 除虫菊に関する調査』 和歌山県内務部
- 「杉線香づくり100年 駒村道廣」セブンイレブンみどりの基金広報誌『みどりの風』(<https://www.7midori.org/katsudo/kouhou/kaze/miserarete/11/index.html>)

#### （付記）

本稿は、三和インセクティサイド（和歌山県有田市）の社史編纂事業より着想を得て、編纂事業終了後も、個人的にタブ粉を中心に調査を進めてきた成果が中心となっている。三和インセクティサイドの田中源一郎会長（当時）をはじめ、グループ会社、関係者の方々の協力により、タブ粉の歴史と民俗に光を当てることが可能となった。あらためて心より御礼申



し上げたい。福岡県八女市のタブ粉生産にかかわってこられた方々には社史編纂事業の際にお世話になった。また、和歌山県すさみ町で線香水車復活プロジェクトを推進している井澗家の方々、同県古座川町で線香水車を経営していた三栖家の方々には、令和2年（2020）以降にタブ粉を製粉する工程について聞き取りをさせていただいた。お世話になってきたすべての方々に御礼申し上げたい。

なお、注記のない写真は筆者撮影である。